

バトリシア・マズイ監督特集

Focus Patricia MAZUY

批評家たちが選ぶ
2022-2024 ベスト

Sélection des films
préférés de la critique 2022/2024

知られざる
ヌーヴェル・ヴァーグ
リュック・ムレ特集

Rétrospective Luc MOULLET



走り来る男 Peaux de vaches (1988) ©DR



ポール・サンチェスが戻ってきた! Paul Sanchez est revenu ! (2018) ©DR



ボルドーに囚われた女 La Prisonnière de Bordeaux (2024)

[トークイベント情報]			
日時	時間	イベント	ゲスト 講師
6/7 (土)	17:30	『テンブル森のギャングたち』上映後オンライントーク	ラバ＝アメール・ザイメッシュ
6/8 (日)	15:00	映画のアトリエ「リュック・ムレ: 芝居の詩学」	高生賢 (映画作家・映画批評家)
6/14 (土)	17:00	『彼のイメージ』上映後のオンライントーク	ティエリー・ド・ベレット
6/21 (土)	17:30	先行上映「サターン・ボウリング」上映後トーク	バトリシア・マズイ
6/22 (日)	16:00	『ボルドーに囚われた女』上映後マスタークラス	バトリシア・マズイ
6/29 (日)	18:00	座談会「批評と上映」	降矢聡 (クッチーズ・ブリススクール主宰)、森田佑一 (punkte)、鈴木里実 (Stranger 番組編成)
7/6 (日)	18:30	座談会「映画批評の現在」	*登壇者は追ってお知らせします。

走り来る男 Peaux de vaches
[フランス/1988年/87分/カラー]
出演:ジャン＝フランソワ・ステヴナン、サンドリーヌ・ボネール、ジャック・スピエセル
1989年カンヌ国際映画祭ある視点部門出品作品
北フランスのある田舎町、ジェラルは兄とともに酩酊し、農場に火事を起こしてしまい、たまたまそこにいた浮浪者が命を落としてしまう。10年後、刑務所から出所した兄は、美しいアニーと結婚し、娘ができ、あらに農場を持つジェラルのもとに戻ってくる。はたして彼は復讐を果たしに帰ってきたのだろうか…。撮影はヌーヴェルヴァーグを支えた名匠ラウル・クタル。
「防寒帽」を見てからステヴナンのファンになり、彼のための映画を撮りたいと思っていた。帰還する男を通して、攻撃的、暴力的な側面もある現代の田舎を浮かべ上から見え、家族の中に潜むものを触発したかった。そして「冬の旅」で発見したサンドリーヌ・ボネール、そして弟役にジャック・スピエセルを見出し、映画は始動し始めた!——バトリシア・マズイ

ポール・サンチェスが戻ってきた! Paul Sanchez est revenu !
[フランス/2018年/101分/カラー]
出演:ローラン・ラフィット、ジタ・オンロ、フィリップ・ジラル
10年前に失踪した犯罪者、ポール・サンチェスが、プロヴァンス地方のレ・ザルクで目撃されたという。憲兵隊舎では誰もそのことを本気にしなかったが、若い憲兵のマリオンは違った…。
「このような場所を映画に撮れるのはバトリシア・マズイにおいて他にいないだろう。丘陵、レ・ザルク、谷、国道、まるでラオール・ウォルシュの映画に見られるような広大な世界。ある人物の狂気が拡散していくとともに物語が展開し、やがてその狂気は集団の中へと波及していく」(「リベラシオン」)
「バトリシア・マズイは、彼女が切り拓いてきた山、自由なトーンで染めてきた異色のフィルムグラフィ、そしてフランス映画界における破天荒な立場から、映画の悪夢を真刻にとらえる不穏で遊び心に溢れ、ゾクゾクするような、突拍子もないやり方を担っている!」——ジャン＝フィリップ・テッセ (「カイエ・デュシネマ」)

ボルドーに囚われた女 La Prisonnière de Bordeaux
[フランス/2024年/108分/カラー]
出演:イザベル・ユペール、アフシア・エルジ、マーニュ・ハヴァード・ブレック
カンヌ国際映画祭監督週間出品
ボルドーのある屋敷に一人で暮らすアルマと、郊外に住む若い母親ミナは、同じ刑務所に留置されている夫の不在を中心に生活を組み立てていた。夫たちの面会に訪れたとき、二人の女性はお会い、混乱に満ちた、ありえないような友情を育むことになる…。
「この企画の逆説こそ強みになると思いました。人間関係について語りかけ、私たちを引き込むロマネスクな魅力があると。犠牲者についての映画ではなく、力強い女にロマン性たちの映画にしたいと思いました。(…イザベル・ユペールとアフシア・エルジのコントラストは大切でした。アフシアにはイザベルの正反対に映ってほしく、対照的であることを強調するために、彼女にはもっと肉感的であることを求めました!」——バトリシア・マズイ

[上映スケジュール] CALENDRIER	
6/6 (金)	(リュック・ムレ プログラム1 Luc Mouliet programme 1) 15:30 黒い大地 Terres noires (19分) ブリジットとブリジット Brigitte et Brigitte (75分) 18:00 *上映後、ジャン＝マリー＝ラリユー監督とのオンライントークあり Suivi d'une discussion en ligne avec Jean-Marie Larrieu
	12:00 ゴールドマン裁判 Le Procès Goldman (116分) 6/7 (土) 15:00 (リュック・ムレ プログラム2 Luc Mouliet programme 2) 食事の起源 Genèse d'un repas (113分) 17:30 テンブル森のギャングたち Le Gang des Bois du Temple (114分) *ラバ＝アメール・ザイメッシュ監督とのオンライントークあり Suivi d'une discussion en ligne avec Rabah Ameur-Zaimèche
	(リュック・ムレ プログラム3 Luc Mouliet programme 3) 12:30 開栓の試み Essai d'ouverture (15分) カッブルの解剖学 Anatomie d'un rapport (82分) 6/8 (日) 15:00 映画のアトリエ「リュック・ムレ: 芝居の詩学」 Conférence par Satoshi Kuzu « Luc Mouliet, la poésie de la pauvreté » (90分) uniquement en japonais 17:30 ある王子 Un prince (82分)
6/13 (金)	(リュック・ムレ プログラム4 Luc Mouliet programme 4) 16:30 ウニの陰謀 La Cabale des oursins (17分) ビリー・ザ・キッドの冒険 Une aventure de Billy le Kid (77分) 19:00 テンブル森のギャングたち Le Gang des Bois du Temple (114分)
	(リュック・ムレ プログラム5 Luc Mouliet programme 5) 11:30 地下鉄の改札 Barres (15分) 労働喜劇 La Comédie du travail (88分) 6/14 (土) 14:00 ある王子 Un prince (82分)
6/15 (日)	12:30 ゴールドマン裁判 Le Procès Goldman (116分) (リュック・ムレ プログラム6 Luc Mouliet programme 6) 15:30 焼け過ぎのステーキ Un steak trop cuit (19分) 密輸業者たち Les Contrebandières (80分) 18:00 ジムの物語 Le Roman de Jim (101分)
	6/20 (金) 16:00 ゴールドマン裁判 Le Procès Goldman (116分) 19:00 彼のイメージ A son image (113分)
6/21 (土)	13:00 歓喜 Le Ravisement (97分) (リュック・ムレ プログラム8 Luc Mouliet programme 8) 15:15 ルート17の遭難者たち Les Naufragés de la D17 (81分)
	6/21 (土) 17:30 先行上映 Avant-première サターン・ボウリング Bowling saturne (109分) *上映後にバトリシア・マズイ監督とのティーチンあり Suivi d'une discussion avec Patricia Mazuy
6/22 (日)	13:30 走り来る男 Peaux de vache (87分) 6/22 (日) 16:00 ボルドーに囚われた女 La Prisonnière de Bordeaux (108分) *上映後、バトリシア・マズイ監督のマスタークラスあり Suivi d'une masterclasse avec Patricia Mazuy

第6回 映画批評月間～フランス映画の現在をめぐって～
主催:アンスティチュ・フランセ | 助成:アンスティチュ・フランセ・ハル本部、ユニフランス | アンスティチュ・フランセ日本 映画プログラム、オフィシャル・パートナー:CNC、笹川日仏財団 | 特別協力:JAIHO、一般社団法人コミュニティシネマセンター、punkte | フィルム提供及び協力:アンドルフィ、アテネ・フランス文化センター、ビフォー・フィルム、レ・フィルム・デュ・ロザンジュ、MK2、ピラミッド・インターナショナル、リーズン8、サンリス・フィルム、東京国際映画祭、ラトラヴェルズ、VIPO
6^{ème} Mois de la critique – nouveaux rendez-vous du cinéma français
organisé par l'Institut français du Japon | avec le soutien de: Institut français, CNC, Fondation Sasakawa, Japan Community Cinema Center, Punkte | Merci à andolfi, Be for Films, Centre culture d'Athénée française, les Films du Losange, MK2, Pyramide International, Reason 8, Senlis Films, Tokyo International Film Festival, la Traverse, VIPO.

6/29 (日)	11:00 ポール・サンチェスが戻って来た! Paul Sanchez st revenu ! (101分) 14:00 走り来る男 Peaux de vache (87分) (リュック・ムレ プログラム7 Luc Mouliet programme 7) 16:00 メドールの帝国 L'Empire de Médor (13分) 映画館の座席 Les Sièges de l'Alcazar (57分) ロングスタッフ氏の亡霊 Le Fantôme de Longstaff (20分)
	18:00 座談会「批評と上映」 Table ronde « Quel est le rapport entre le métier de critique et les films aujourd'hui » uniquement en japonais 7/4 (金) 16:45 (リュック・ムレ プログラム1 Luc Mouliet programme 1) 黒い大地 Terres noires (19分) ブリジットとブリジット Brigitte et Brigitte (75分) 19:00 ポール・サンチェスが戻って来た! Paul Sanchez st revenu ! (101分)
	12:30 (リュック・ムレ プログラム2 Luc Mouliet programme 2) 食事の起源 Genèse d'un repas (113分) 7/5 (土) 15:00 ボルドーに囚われた女 La Prisonnière de Bordeaux (108分) 17:30 歓喜 Le Ravisement (97分)
7/6 (日)	(リュック・ムレ プログラム3 Luc Mouliet programme 3) 13:30 開栓の試み Essai d'ouverture (15分) カッブルの解剖学 Anatomie d'un rapport (82分) 16:00 イート・ザ・ナイト Eat the night (107分)
	座談会「映画批評の現在」 Table ronde « Quel est le rapport entre le métier de critique et les films aujourd'hui ? » uniquement en japonais 7/11 (金) 15:30 (リュック・ムレ プログラム4 Luc Mouliet programme 4) ウニの陰謀 La Cabale des oursins (17分) ビリー・ザ・キッドの冒険 Une aventure de Billy le Kid (77分) 18:00 パシフィクション Pacifiction (165分)
7/12 (土)	14:30 パシフィクション Pacifiction (165分) 18:00 歓喜 Le Ravisement (97分)
	(リュック・ムレ プログラム8 Luc Mouliet programme 8) 14:00 ルート17の遭難者たち Les Naufragés de la D17 (81分)
7/13 (日)	(リュック・ムレ プログラム6 Luc Mouliet programme 6) 16:00 焼け過ぎのステーキ Un steak trop cuit (19分) 密輸業者たち Les Contrebandières (80分)
	(リュック・ムレ プログラム5 Luc Mouliet programme 5) 18:30 地下鉄の改札 Barres (15分) 労働喜劇 La Comédie du travail (88分)
7/19 (土)	(リュック・ムレ プログラム7 Luc Mouliet programme 7) 12:00 メドールの帝国 L'Empire de Médor (13分) 映画館の座席 Les Sièges de l'Alcazar (57分) ロングスタッフ氏の亡霊 Le Fantôme de Longstaff (20分) 14:15 イート・ザ・ナイト Eat the night (107分) 17:00 パシフィクション Pacifiction (165分)

入場料金:一律1,100円 (全席自由/チケット番号順)
*の付いたオンライントーク付の回のみ1,500円
Peatix (https://tjtky.peatix.com/events) にて発売中。
窓口販売はございませんのでご注意ください! 上映開始15分前開場
上映開始10分後以降の入場はご遠慮下さい

[JAIHOでの配信情報]

世界中から厳選し、「今、観るべき最高に面白い映画」を提供しているJAIHO (ジャイホー) にて本映画祭の特別セレクションが8月1日(金)より順次、各作品2ヶ月間限定配信されます。詳細は以下のHPをご覧ください
月額990円(税込) 公式HP: www.jaiho.jp

[会場・お問い合わせ]

東京日仏学院

〒162-8415
東京都新宿区西谷船河原町15
TEL 03-5206-2500
FAX 03-5206-2501

第6回
映画批評月間

フランス映画の現在をめぐって

6^{ème} édition du Mois de la critique
Nouveaux rendez-vous du cinéma français

2025. 6/6 (金) — 7/19 (土)

会場 東京日仏学院

du 6 juin au 19 juillet 2025 à l'Institut français de Tokyo

バトリシア・マズイ監督特集

Focus Patricia MAZUY

批評家たちが選ぶ
2022-2024 ベスト

Sélection des films
préférés de la critique 2022/2024

知られざる
ヌーヴェル・ヴァーグ
リュック・ムレ特集

Rétrospective Luc MOULLET

【特別ゲスト】

バトリシア・マズイ

INVITÉE SPÉCIALE

PATRICIA MAZUY

第6回 映画批評月間

フランス映画の現在をめぐって

6^{ème} édition du Mois de la critique : Nouveaux rendez-vous du cinéma français

(左から) ある王子 Un prince (2023)、歓喜 Le Ravisement (2023)、イート・ザ・ナイト Eat the night (2024)、彼のイメージ A son image (2024)、ジムの物語 Le Roman de Jim (2024)

日本ではめったに見られない近作や、隠れた名作を紹介する特集「映画批評月間 フランス映画の現在をめぐって」が今年も開催されます。第6回目となる今回は、「サターン・ボウリング」が今秋に日本公開されるバトリシア・マズイ監督をお迎え、同作品の先行上映のほか、初長編作「走り来る男」から最新作「ボルドーに囚われた女」まで4本を一挙上映します。そのほか、カンヌ国際映画祭をはじめとした映画祭や、批評家たちから高く評価された日本未公開作品を8本上映。また「知られざるヌーヴェル・ヴァーグの作家」リュック・ムレを特集します。上映のほか、ゲストを迎えたトークショーもぜひお楽しみに!

本映画祭は、コミュニティシネマセンター主導で、日本各地で巡回されます。開催の日程、会場については追って以下のサイトほかで告知します。
コミュニティシネマセンター <http://jc3.jp/wp/>

バトリシア・マズイ監督特集

Focus Patricia MAZUY

バトリシア・マズイは、フランス映画の中でも、大変ユニークで力強いスタイルを確立している稀有な映画作家です。アメリカ滞在中に出会ったアニエス・ヴァルダの庇護のもと、最初の短編を監督し、ヴァルダの最高傑作とも評される『冬の旅』(1985年)で編集を担当します。1989年に発表した初長編監督作『走り来る男』以降、マズイの映画は、激しい感情、あるいは断固たる決意をひめたヒロインを主人公としています。フォードとカーペンターというアメリカ映画の偉大なるふたりのジョンをこよなく敬愛し、広い空間と独特なロケーションを好み、階級闘争や、馬や牛といった動物への情熱、自然との関係を描きながら、彼女の映画は人間の紆余曲折した運命に光を当て続けてきました。オフビートな西部劇風サスペンス『ポール・サンチェスが戻って来た!』、兄弟間の対立を背景に、フェミサイドの問題を浮き彫りにするスリラー『サターン・ボウリング』、そして最新作『ボルドーに囚われた女』ではイザベル・ユペールとアフシア・エルジ、ふたりの偉大な女優が演じる世代、階層の異なる女性間の友情、テンション、サスペンスが見事に描かれています。

サターン・ボウリング Bowling Saturn

[フランス=ベルギー-/2022年/114分/カラー]
出演:アリエ・ワルトアルテ、アシル・レジニ、イラン・ルーカス、レイラ・ミュース
ロカルノ国際映画祭2022金獅子賞ノミネート
「カイエ・デュシネマ」2022年ベストテン第6位
父親が亡くなり、警察官のギヨームは、父が遺したボウリング場を、社会の周辺で生きてきた腹違いの弟アルマンに譲る。しかしその遺産は呪われたもので、ふたりを暴力の深淵に突き落とすことになる…。ニコラス・レイ、バク・チャヌク、大島渚などにオマージュを捧げ、古典的なフィルム・ノワールの方法を踏襲しながら、現代的な暴力の問題を炙り出したネオ・ノワールの傑作。
「フィルム・ノワールの規範を踏まえつつも、「サターン・ボウリング」は多くの点でそれから距離を置いている。バトリシア・マズイによる重要な選択のひとつは、ドラマの緊張感を維持するために音楽に頼るのではなく、沈黙を存在させることである。彼女の映画は、表面的な問題よりも、暴力という不透明な深淵に関心があり、決して自己満足に陥ることなくその淵に留まるからだ!」——オリヴィア・クーパー=バジアン (「カイエ・デュシネマ」)
2025年秋 ユーロスペースほか全国順次ロードショー
公式HP: <https://senlisfilms.jp/saturnbowling/>

サターン・ボウリング Bowling Saturne (2022) ©DR

批評家たちが選ぶ 2022-2024 ベスト

Sélection des films préférés de la critique 2022/2024

2022年から2024年までに製作され、世界的にも評価を得た優れたフランス映画から、日本でなかなか見られる機会のない作品を選りすぐり紹介します。



パシフィクション Pacifiction (2022) ©Film Boutique

パシフィクション Pacifiction d'Albert Serra
[スペイン=フランス=ドイツ=ポルトガル / 2022年 / 165 分 / カラー]
監督:アルベール・セラ 出演:ブノワ・マジメル、パホア・マハガファナウ、マルク・スジーニ
第75回カンヌ国際映画祭コンペティション部門出品 / 「カイエ・デュシネマ」2022年ベストテン第11位
タヒチ島のデ・ローラー共和国高等分務官は、完璧なマナーを持つ計算高い男だ。公式レセプションでも裏社会でも、彼はいつ怒りが爆発するかわからない地元住民の動向を常に気にかけている。潜水艦が目撃され、その幽霊のような存在がフランスの核実験再開を予告しているという噂が絶えないからなおさらである。
「『パシフィクション』は、茫然自失される映画であり、茫漠とした夢の海を漂う大きな客船であり、溢れんばかりのフィクションのマグマであり、クリス・マルケルが「異 / 放国 (Le Dépayés)」と呼んだであろう現実と空想の映画の領域、未知の領域に挑んだ作品である」——マチュー・マシュレ (ル・モンド))



ゴールドマン裁判 Le Procès Goldman (2023) ©Séverine Ergest

ゴールドマン裁判 Le Procès Goldman de Cédric Kahn
[フランス / 2023年 / 116 分 / カラー]
監督:セドリック・カーン 出演:アリエ・ワルトアリテ、アルチュール・アラリ、ステファン・グラン・ティリー
第76回カンヌ国際映画祭監督週間オープニング作品
70年代にフランス中を騒がせたピエール・ゴールドマン事件の法廷を再現した息もつかせぬ裁判映画。複数の強盗罪で起訴中のピエール・ゴールドマンは、自身の罪を認めながら、唯一、薬局で起きた殺人事件だけは否認、公判が開かれる。しだいに警察の杜撰な捜査やユダヤ人差別など数々の問題が浮上してくる。フラッシュバックはいっさい用いられず、法廷での俳優たちのやり取りがほとんど実写に近い状況でカメラに収められていく。「これこそが裁判映画の大きな強みであり、カーンはこれを見事に利用している。つまり1976年のものであれ、今日のものであれ、個人の深みと矛盾を掘り起こし、それを組織の衰れな健全さと対話させるのである」——リュドヴィック・ベオ (レザンロキュプティブル))



ある王子 Unprince (2023) ©DR

ある王子 Unprince de Pierre Creton
[フランス / 2023年 / 82 分 / カラー]
監督:ピエール・クレトン 出演:アントワヌ・ピロット、ピエール・クレトン、ヴァンサン・パレ
第76回カンヌ国際映画祭監督週間出品 / 「カイエ・デュシネマ」2023年ベストテン第10位
ピエール=ジョゼフは庭師になるため、訓練見習いセンターに入る。そこで彼は、校長のフランソワーズ=ブラウン、植物学の教師アルベルト、雇い主アドリアンなど、さまざまな人物と出会う。彼らは皆、ピエール=ジョゼフの見習い時代に決定的な役割を果たし、セクシュアリティを解放してい。そして40年の月日が経つ…。「『ある王子』は、人間から動物まで、風景から花々まで、生者の生命が死者の生命を迎え入れ、交じり合い、微笑み合う喜びの園、発明された共同体を称揚し、勇気づけられる哲学的ユートピアである」——ジュラルム・ラフォール (レザンロキュプティブル))

歓喜 Le Ravisement d'Iris Kaltenböck
[フランス / 2023年 / 97 分 / カラー]
監督:イリス・カルテンバック 出演:アフシア・エルジ、アレクシ・ナナンティ、ニナ・ミュリス
第76回カンヌ国際映画祭批評家週間出品
仕事に熱心な助産師のリディアは、恋愛で破局を迎えていた。同じ頃、親友のサロメから妊娠を告げられ、妊娠の経過を追ってほしいと頼まれる。友人の赤ん坊を抱いていたリディアは、一夜限りの相手ミロスと出くわしたその日、すべてを失う危険を冒して嘘の世界へと飛び込んでいく…。
「『歓喜』の魅力をまずもって伝えるには、主演女優の顔以外ないだろう。そう、これまでと同様、アフシア・エルジがスクリーンに登場する度に、私たちは彼女の寡黙な微笑み、瞳の動かし方、私たちの知らない過去で重くなった顔をじっと見つめてしまうのだ」——サンドラ・オナナ (リパレーション))



歓喜 Le Ravisement (2023) ©DR



テンプル森のギャングたち Le Gang des Bois du Temple (2023) ©DR

テンプル森のギャングたち Le Gang des Bois du Temple de Rabah Ameur-Zaimèche
[フランス / 2023年 / 114 分 / カラー]
監督:ラバ=アメル・ザイメッシュ 出演:レジス・ラロッシュ、フィリップ・ブティ
「カイエ・デュシネマ」2023年ベストテン第8位
労働者階級が住む地区ボワ・デュ・テンプに、引退した兵士が住んでいる。彼が母を埋葬しているその時、団地のギャング団に属している隣人のベベが、裕福なアラブの王子の護送車を襲撃する準備をしていた…。
「なんて壮大な犯罪映画なんだ、と上映を終えてあなたは感嘆とともに口にするだろう。しかしその壮大さは、あなたが期待するような偉大な『ネオノワール』のような作品には似ていないからであり、より正確に言えば、内側から作り直され、地理的・社会的文脈に即し、芸術的気質に従ってそれが再定義されているところにある」——ジャック・マンデルバウム (ル・モンド))



イート・ザ・ナイト Eat the night (2024) ©ATELIER DE PRODUCTION- AGAT FILMS & ICE

イート・ザ・ナイト Eat the night de Caroline Poggi, Jonathan Vinel
[フランス / 2024年 / 107 分 / カラー]
監督:キャロリーヌ・ポギ&ジョナサン・ヴィネル
出演:リラ・ゲー、テオ・チョルビ、エルム・ケゴバ・ファレ
第77回カンヌ国際映画祭監督週間出品
パブロとアポの兄妹は長年に渡りオンラインゲームのダークヌーンにハマってきたが、突然のサービス終了の知らせに衝撃を受ける。アポが自身のアバターとの別れを惜む一方で、現実世界でヤクの取引に携わるパブロは新しい相棒との関係を深め、敵対グループといがみ合う。スリラーとロマンス、リアルとバーチャルが巧みに交錯する青春映画。ベルリン映画祭で初短編が最高賞を受賞したコンビ監督による2本目の長編作品。
「イート・ザ・ナイト」は、喉と内臓をわしづかみにする見事なスリラーだが、同時に現代のトラウマを描いた素晴らしいフィクションでもある」——リュドヴィック・ベオ (レザンロキュプティブル))



彼のイメージ A son image (2024) ©Line Films Velvet - ARTE France Cinéma

彼のイメージ A son image de Thierry de Peretti
[フランス / 2024年 / 113 分 / カラー]
監督:ティエリー・ド・ペレティ
出演:クラ=マリア・ラレド、マルク・アントヌ・モッツィコナッテリイ・スタラース
第77回カンヌ国際映画祭監督週間出品
コルシカ島の地方紙で働く写真家のアントニアが交通事故で死亡し、その葬儀のために家族や友人たちが集まる。そして、アントニアが18歳だった1980年に遡り、そこからの20年あまりの彼女の人生が描かれる。ジェローム・フェラーリ的小説に基づき、個人のエピソードをモザイク状に構成し、その背景にコルシカの社会状況のうねりを描く構成が見事。
「偉大なるロマネスク的一大絵巻であるとともに、写真の役割に関する理論である本作は、ある人生について、そしてイメージの年代記であり、現実を不滅のものとするイメージの能力と、その試みの複雑さについての考察でもある」——リュドヴィック・ベオ (レザンロキュプティブル))



ジムの物語 Le Roman de Jim (2024) ©DR

ジムの物語 Le Roman de Jim d'Arnaud et Jean-Marie Larrieu
[フランス / 2024年 / 101 分 / カラー]
監督:アルノー&ジャン=マリー・ラリュー 出演:カリム・ルクルー、レティシア・ドッシュ、サラ・ジロド、ベルトラン・ブラン
第77回カンヌ国際映画祭カンヌ・プレミア出品 / カリム・ルクルー第50回セザール主演男優賞受賞
ジュラ山脈に囲まれ街サン・クロードで、心優しい青年エメリックはかつての仕事仲間フロランスと再会する。妊娠6カ月のフロランスと暮らすようになったエメリックは、生まれたきたジムを自分の子のように育て、ふたりの間には強い絆が生まれる。しかし、ある日ふたりの前に実の父親クリストフが現れる。それはメロドラマの始まり、そして父親としての放浪と冒険の旅の始まりであった。
「ラリュー兄弟によるこの美しい映画は、非典型的な父親の物語を大いなるロマネスクの力で展開し、思いがけないところで感動を呼び起こす」——ジャッキー・ゴールドベルグ (レザンロキュプティブル))

知られざるヌーヴェル・ヴァーグ リュック・ムレ特集

Rétrospective Luc MOULLET

「リュック・ムレは、ブニュエルとタチの両者を継承するおそらく唯一の存在だ。」ジャン=マリー=ストロープ (映画作家)
ヌーヴェル・ヴァーグ唯一のバレースク映画作家であり、フランスをはじめ世界的にカルト的な人気を誇るリュック・ムレを特集します。コメディ、冒険活劇、西部劇、日記、ロードムービー、犯罪映画、そしてカップル、地理、文学作品を題材にした作品など、あらゆるフォーマット、あらゆるジャンルで38本の映画を生んできたユニークな作家の世界をまずは7本の長編映画と8本の短編・中編映画のプログラムで見見しましょう!



©DR

【長編作品】



ブリジットとブリジット Brigitte et Brigitte (1966) ©DR



密輸業者たち Les Contrebandiers (1967) ©DR



ビリー・ザ・キッドの冒険 Une Aventure de Billy le Kid (A Girl Is a Gun) (1971) ©DR



カップルの解剖学 Anatomie d'un rapport (1976) ©DR

リュック・ムレ Luc Moullet

1937年パリ生れ。18歳で「カイエ・デュシネマ」に映画批評を寄稿し始め、フラーやウルマーらのB級映画を熱烈に擁護。名著『俳優主義』やブニュエル、フリッツ・ラング、キング・ウィダーについてのモノグラフを発表。1960年からは映画監督、1966年からは俳優、そしてプロデューサー（自身の作品だけでなく、ユスターシュやデュラスの作品も）として活動。1965年に『ブリジットとブリジット』で長編デビュー。以後「密輸業者たち」「ビリー・ザ・キッドの冒険」他、傑作が続くが、1980年代に入ってからは短編製作に力を注ぎ、長編は「労働喜劇」(1988年、ジャン・ヴィゴ賞)と「ナルバイヨン」(1992年)のみだったが、2000年代に三本の長編を次々に完成。2009年ボンビドゥー・セクター、2021年にはシネマテーク・フランセーズにて回顧上映が開催されている。

ブリジットとブリジット Brigitte et Brigitte

[フランス / 1966年 / 75 分 / モノクロ] 出演:フランソワーズ・ヴァテル、コレット・デコンブ
ビレネー出身の女の子とアルプス出身の女の子が上京したパリで偶然出会う。同じ名前を持つふたりは意気投合し、一緒に大学生活を満喫しようとするのだが……。長編デビューとなる本作で、ムレは首部に到着した瞬間から、自分の生い立ちを忘れ、見知らぬ世界で受け入れられるために規範に従わなければならない若者たちを観察する。ブラー、ロメール、シャブロルらが友情出演。ゴダールに「真に革命的な映画」と讃えられ、イェール映画祭で審査員特別賞を受賞した。

密輸業者たち Les Contrebandiers

[フランス / 1967年 / 81 分 / モノクロ] 出演:フランソワーズ・ヴァテル、モニーク・ティエリ
架空の国境地帯で「現代に残された最後の冒険＝密輸業」に携わるひとりの男とふたりの女の三角関係と、彼らを摘発しようとする「密輸業組合」と「税関」との三つ巴の攻防が、荒寥とした山岳地帯を背景にコミカルに描かれていく。ムレは思い入れのある南アルプスの山岳地帯を舞台に、人々が単調な日常生活を放棄して危険の嗜好を試す冒険に満ちた追跡劇を想像する。自らが愛する風景の優れた観察者であるムレは、広々とした空間を歪めることなく、一貫性を持たない筋書きと完璧に調和させながら、見事に引き立てている。

ビリー・ザ・キッドの冒険 Une Aventure de Billy le Kid (A Girl Is a Gun)

[フランス / 1971年 / 78 分 / カラー] 出演:ジャン=ピエール・レオ、ラシェル・ケステルベール
たったひとりでウェルズ・ファーゴの駅馬車を襲ったビリーは、戦利品を運ぶのに苦労する。そんな時、ビリーはアンと出会う。ムレはハワード・ホークスを選んで参照しながら、砂漠、断崖、山道を舞台に、少人数のクルーとわずか6日で唯一無二のシュールな西部劇を撮り上げる。まさに感覚的探求の場に放たれ、愛、欲望、共感を見現していく主人公を演じるジャン=ピエール・レオは、この多義的な側面を持つキャラクターによって、これまで演じてきた役やイメージから離れて、俳優としてのあらたな可能性を示している。編集はジャン・ユスターシュが担当。

カップルの解剖学 Anatomie d'un rapport

[フランス / 1976年 / 82 分 / モノクロ] 出演:リュック・ムレ、クリスティエヌ・エベル
映画監督とそのパートナーが、若い女性のフェミニズム意識に影響され、ふたりのカップルとしての関係の難しさを分析し始める。ドキュメンタリーとフィクションの中間に位置する本作は、ムレとパートナーのアントニエッタ・ピゾルノの初の共同監督作品。ムレはこの自伝的作品で自分自身を演じているが、ピゾルノは自分の役をえて「ビリー・ザ・キッドの冒険」でヒロインを演じたラシェル・ケステルベール (愛名でクレジット) に譲っている。本作は、カップルの親密さ、無秩序、異なるニーズを共有させることの難しさについて率直に語るとともに、性の解放が謳われながらも、軽視されがちだった女性の快楽について繊細な探求をしている。



食事の起源 Genèse d'un repas (1979) ©DR



労働喜劇 La Comédie du travail (1988) ©DR



ルート17の遭難者たち Les Naufragés de la D17 (2001) ©DR

【短編作品】

焼け過ぎのステーキ Un steak trop cuit steak

[フランス / 1960 / 19 分 / モノクロ]
つましい食事をめぐって繰り広げられる姉と弟の喧嘩。実の弟アルベール・ジュロス (本名バトリスムレ) と、「ブリジットとブリジット」のヒロインのひとりフランソワーズ・ヴァテルと、ミニマルなセットで驚くほど自由な形式とテーマの初監督作品を発表。

黒い大地 Terres noires [フランス / 1961 / 19 分 / カラー]
道路がなく、この世からほとんど消滅しようとしているビレネー山脈のマンテとアルプスのマリオーのふたつの村を探索する。題材の深刻さと短編映画の遊び心との間に楽しいコントラストを生み出している。

地下鉄の改札 Barres [フランス / 1983 / 15 分 / カラー]
地下鉄の改札を通るためのありとあらゆる方法を紹介するバレースクな語り口のスケッチ集。

メドールの帝国 L'Empire de Médor [フランス / 1986 / 13 分 / カラー]
犬、その飼い主、擬人化:都会における人間の親友の居場所についての辛辣な考察。

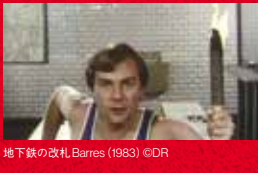
開栓の試み Essai d'ouverture [フランス / 1988 / 15 分]
キャップがどうしてもあかない時、どのようにコカ・コーラのボトルを開けるか。



焼け過ぎのステーキ Un steak trop cuit steak (1960) ©DR



黒い大地 Terresnoires (1961) ©DR



地下鉄の改札 Barres (1983) ©DR



メドールの帝国 L'Empire de Médor (1986) ©DR



映画館の座席 Les Sièges de l'Alcazar (1989) ©DR



ウニの陰謀 La Cabale des oursins (1990) ©DR



ロングスタッフ氏の亡霊 Le Fantôme de Longstaff (1996) ©DR

食事の起源 Genèse d'un repas

[フランス / 1979年 / 115 分 / モノクロ] 出演:リュック・ムレ、アントニエッタ・ピゾルノ
ムレは自分が口にする食べ物の原産地に疑問を抱き、消費から生産までの連鎖をたどって調査することにする。食料生産に携わるフランスと低開発国の労働者の比較を通じて、搾取しているのは資本家ばかりとは限らないという真実が明らかになる。モノクロ映像を生かして、茶目っ気たっぷりのジャブを挟みながら、眠っている良心を目覚めさせ、観客に自分たちでも行動を起こせることを気づかせる本作、最後には、批判の眼は自らの映画作りに向けられる。

労働喜劇 La Comédie du travail

[フランス / 1988年 / 88 分 / カラー] 出演:サビーヌ・オードバン、ロラン・ブランシュ、アンリ・デウス
職業幹旋所に勤めるフランソワーズは、失業中の男性に恋をする。彼女は彼に仕事を見つけてあげる手を尽くすのだが、実は男は「プロの失業者」だったことで悲喜劇に…。前作「食事の起源」から9年後、ムレは仕事の世界に飛び込み、失業という複雑なテーマに挑み、過度に重要視されるネットワークからヒエラルキーの不条理まで、不平等なシステムを永続させる悲劇的な現実をあと笑ってみせる。ヒロインのサビーヌ・オードバンは、以後、ムレ作品の常連となる。ジャン・ヴィゴ賞受賞。

ルート17の遭難者たち Les Naufragés de la D17

[フランス / 2001年 / 81 分 / カラー] 出演:バトリック・ブシエー、イリアナ・ロリック、サビーヌ・オードバン、マチュー・アマルリック、ジャン=クリストフ・ブーヴェ
湾岸戦争中、カーリーのチャンピオンとその若い副ドライバーは、アルプド=オート=プロヴァンスの人里離れた道で立ち往生する。そこで彼らは、宇宙物理学者、羊飼いの、兵士たちと出会い、一見したところ平和な場所を発見するのだが…。エルンスト・ルビッチの「山猫リュシカ」やセシル・B・デミルの「昨日への道」にインスパイアされたムレは、限界ぎりぎりの奇妙な主人公たちの対立と、激化する湾岸戦争の間に大胆な平行線を描く。

映画館の座席 Les Sièges de l'Alcazar

[フランス / 1989 / 57 分 / カラー]
出演:オリヴィエ・マルティニ、エリザベト・モロー、サビーヌ・オードバン
1955年、パリ。「カイエ・デュシネマ」誌の批評家ギョは、地元の映画館にヴェトリオ・コッパファヴィの映画をよく観に行く。そこで敵対する雑誌「ボジテフ」の批評家ジャンヌと恋に落ちるのだが…。シネフィルの日常が痛風に描き出される。

ウニの陰謀 La Cabale des oursins [フランス / 1990 / 17 分 / カラー]
北フランスのぼた山が、コロラド州のグランドキャニオンやエジプトのピラミッドと同じように、観光名所とみなされたらどうだろう?地理をこよなく愛するムレがフランスを旅する。

ロングスタッフ氏の亡霊 Le Fantôme de Longstaff

[フランス / 1996 / 20 分 / カラー]
出演:イリアナ・ロリック、エレヌー・ラビオヴェル、ジェフリー・キャリー
原作:ヘンリー=ジェイムズ短編集「ロングスタッフの結婚」
1880年、ノルマンディーの浜辺で、喘息で顔死の裕福なイギリス人が、若く美しいアメリカ人女性と出会い、恋に落ちる。彼女は彼を拒絶するが、2年後、彼は再び現れる……。綿密なフレーミングと洗練された演技でヘンリー=ジェイムズの世界を見事に描き出す。